

合成ダイヤモンドに関する勉強会

この度 JGS では、中央宝石研究所、リサーチ室部長：北脇裕士博士をお招きし、合成ダイヤモンドに関する勉強会、「合成ダイヤモンド【世界の最新事情】をお聴きする会 ～中国・インドの製造工場を訪問して～」を3月15日（金）に開催いたします。

北脇博士は、1月のIJTでのセミナーをはじめ、業界団体の様々な場面で合成ダイヤモンドの最新情報を報告されており、今回もインドにおけるCVD合成ダイヤモンドの現状を報告していただきます。

合成ダイヤモンドに関しては、昨年デビアス社が合成ダイヤモンドのジュエリー「Light Box」を9月からアメリカ本土で販売されたのをきっかけに、それ以降国内でも新聞、TV等で取り上げられるようになり、業界内での関心も高まってきました。

1月のIJTの会場においても国内・海外合わせ6社の合成ダイヤモンドの業者が出展しており、今後に対する商談も行われたようです。

北脇博士の講演の中にもありましたが、ほかの業界団体で、1月に上海に視察ツアーを組み、CVD合成ダイヤモンドの工場を見学しました。

その会社はIJTにも出展していたZS Technology社で、工場内部は見学できませんでしたが、製造されたルースや研磨される前の原石を見せてもらいました。

将来を見据えた事業を志し、色の改変処理は行わずDからHカラーの1ctアップのラウンドとファンシーシェイプに特化して製造していました。

年間、原石で5万キャラットの生産を目指し、工場の規模拡大を進めており、今はアメリカのマーケットが中心だが、世界進出をもくろんでいます。

また、ピンクの合成ダイヤモンドも見せてもらいましたが、好まれる最高の色を研究しているとのことでした。

北脇博士はこの企業をはじめ、中国のHPHT合成やインドのCVD合成の企業を実際に訪れ、そのテクノロジーの進歩を肌で感じています。

合成ダイヤモンドは、鑑別機関で専門の機械で鑑別しなければ、天然と見分けが付きません。

だからと言って、天然と全く同じではありません。機械で大量に作られるため希少価値はないからです。

IJT 期間中、JJA(日本ジュエリー協会)、TDE(東京ダイヤモンド・エクステンジクラブ)、AGL(宝石鑑別団体協議会)の 3 団体が合同で会見し、合成ダイヤモンドの表記について「合成ダイヤモンド」という呼称に統一することを報道機関にお願いしました。

その会場でも質疑応答の中で、合成ダイヤモンドは宝石なのかの質問に対し、宝石の要素である「美しさ」「耐久性」「希少性」の 3 つの要素を満たしていないため、宝石ではないと断定されましたが、合成ダイヤモンドを金やプラチナで加工したらジュエリーと呼べるのかという質問に対しては、明確な回答がなされませんでした。

現状では、様々な業者が商売を目的に、合成ダイヤモンドの販売を手掛けていくことが予想されます。

業界団体としては、用語や表記の仕方を整備し、消費者に混乱を与えないよう備えなければなりません。

デビアス社の「Light Box」のように明確にアクセサリと認識して販売されるようになれば、分かり易いと思われそうですが、しばらくは混沌とした状況が続くと予想されます。

まずは最新の情報を入手していくことが重要であり、そのためにも今回のような勉強会を定期的に行っていくことが、JGS に求められる使命と考えます。

会員外の方の参加も歓迎いたしますので、ふるっての参加をお願いいたします。

一般社団法人 日本宝石協会 理事
株式会社 柏圭 代表取締役会長
加藤久雄